

私は、大正4年1月1日に大田区石川町で生まれました。今でこそ住宅が密集していますが、当時は辺り一面が畑でのどかな町であったことを記憶しています。学校へは近所の友達と近道をしようと「国の湯」あたりの通称「糞坂（くそざか）」を歩いて通いましたが、雨でも降れば、家に着く頃には泥だらけになったものでした。

そして、子供時代の鮮明な記憶として残っていることは、大正12年9月に発生した関東大震災です。家も仕事も一瞬にして失った出来事で、私の父親も外へ出て行ったまま帰って来ませんでした。ですから、私と兄は日当30銭の芝刈りの仕事を始めました。当然学校へ行っても弁当を持っていきませんでしたので、昼時は自宅で食事を取るふりをして「糞坂」の雑木林で時間を過ごしたのを覚えています。

そんな厳しい時世でしたが、池雪小学校では当時の佐野校長先生や担任の米川先生には可愛がってもらいました。いたずらや悪さをする先生から竹の棒で叩かれたり、水の入ったバケツを持って廊下に立たされたことも、80年以上経った今では良い思い出です。

私の子供時代は貧しいながらも、親や学校、近所から善悪の分別は厳しく教えられました。しかし、今は恵まれた時代であるにもかかわらず、学校の給食費を払わない親がいると知りました。これは泥棒と同じことです。そういう行いが悪いことだと気づかない親も不幸ですが、子供はもっと不幸なことです。何か本当に大切なことが失われつつあるのではないかと懸念しています。

（石川台 直井 武蔵）



練習し、その後四時頃までお茶を飲みながら談

（南雪谷 南雪会民謡サークル）

民謡サークルは、後藤千代子さんをリーダーに、九十歳から八十一歳の年は取っても気分が若い七名が、毎週金曜日一時から三時まで自治会館の畳の間で、後藤さんの三味線生演奏に合わせて

参加しています。南雪谷地区老人会の南雪会には、五十五歳以上の男女百名以上が参加しています。中でも踊りと民謡のサークルは毎年企画される旅行や新年会・ひな祭り・敬老会等で会をおおいに盛り上げています。また、書道サークルと共に平素から定期的に活動しており、大田区老人クラブ連合会の踊りと民謡の会や、文芸展にも



た。私達は彼女の生演奏に合わせて大声で唄えることを誇りに思っています。会費が只なのも嬉しく、何時までも元気で仲良く、この会を続けていきたいと思っています。興味のお有りの方は南雪谷自治会館までどうぞ。

笑。たまには食事会も楽しみます。持ち唄は「吾野機織唄」「シャン馬道中」等五十曲程あります。後藤さんは最近日本民謡協会から、民謡貢献章を授与されました。

サークル紹介 42
南雪会民謡サークル

美しい環境づくり 29

美しく整備された呑川



明治・大正期の呑川は小流であり屈曲も多く、主に灌漑用に使用されていた。当時の流路は、現在のような直線的な流れではなかった。石川橋のところから現在の池上線のガードを通過して尚徳学園（現聖徳学園）の西側を道に沿って流れていた。石川橋の南には水車小屋があり、米を搗いていたという。

当時の呑川は飲料水としても使用されていたごとく清流であって、コイ・フナ・ハヤ・ヤマベ・メナゴ・ウナギ・ナマズ・エビ・メダカ・カニ・カメ・スッポン・シジミ等が棲んでいたという。

関東大震災後、東京の周辺地区は急激に人口が増え、交通の発達には更にこれに拍車を加え、呑川周辺も次第にその様相を変えていった。

70歳過ぎの人に話を聞くと、少年時代は呑川で泳いだり、魚やうなぎを取って食べたという。ところが、昭和30年頃からは中原街道の冠水はもちろん、下流の方では床下、床上浸水の被害が周辺に及んでいた。

現在、護岸や下水道が整備され、大雨が降っても安心して過ごせる環境になった。呑川の付近を通る度に、美しく安定した呑川を実感するこの頃である。

（東中 M・K）



「お詫びと訂正」
ふれあい雪谷二十年もみじ号掲載の俳句の作者「服部ふさえ」は「服部あさえ」の間違いでした。お詫びして訂正いたします。

「編集後記」
あけまして おめでとう ございます。新年号では、年男・年女の方に、今年の抱負を書いて頂いております。それぞれの年代で、どんな目標を持っていたら嬉しいか、興味深く読ませていただきました。これからの地域の皆様方のご協力を得て、編集委員一同頑張ってまいります。本年もよろしくお願い申し上げます。

（笹丸 横田 順）

〔発行〕わがまち大田雪谷地区推進委員会
〔編集〕ふれあい雪谷編集委員会
連絡先 雪谷特別出張所
大田区東雪谷三六二一
電話 三七二九一五二一
〔発行日〕平成二十一年一月一日
通巻第七十三号

ホームページ

http://koho/nishi/nishi_news/yukigaya/index.html

ふれあい
雪谷

平成21年

新年号

通巻第73号



（東雪 西本 頼雄さんの作品）

“洗足池は美しい！”ちょっとタイムスリップしてみよう！

1860年（万延元年）、当時のプロシャから開国交渉の全権大使としてやってきたオイレンブルク伯爵。散策好きの彼は攘夷で騒然、沸騰していたこの時代、無謀？にも赤羽根（今の港区東麻布）の領事館から馬を駆けて洗足池へ。滞在4か月の間に2回もやってきています。最初は秋11月、イギリス公使オールコックら20人余を誘って、一度は師走半ばの湖畔パーティ。この時はアメリカ公使ハリス、オランダ人ヒュースケン、プロシャ公使館員全員などで朝食会を開いています。

この洗足池を「センジョコ」といい、また「鴨の池」と愛称していたようです。また、天を衝く木と社が描かれた絵「洗足池の神社」がドイツにあります。A・ベルクという画家の作です。この木は実在していました。正面の千束八幡の「千束の大松」です。樹齢千年といわれ、高さ30メートル余り、古老によると5人でも抱えきれなかったそうです。残念ながら大正の初めごろ枯れましたが、「日は暮れて足元暗く帰るさに、空に映れる千束の松」と詠まれています。

伯爵の手紙には「池上から西へ丘陵を越えていくと小さな湖に出る。秋になると何千という野鴨。冬には雁の大群がやって来る。鳥類が豊富で鷺や鶴が田圃の泥の中を歩いて蛙や魚を探している」と。また、湖面には緑の梢が映えて美しく「この場所は実に愛すべき平和なものだったので、我々はしばしば遠乗りの行先と決めたものだった」と書いています。池のたたずまいを、一幅の名画のように「今日はまったく、くっきりと浮き出ている富士の山の後ろに、ちょうど日が沈んだところで、反対側にはもう満月が空に輝かしく上がっていて、美しいこの辺りを魅するよう照らしていた」と感動を述べているのです。帰り道、気分が良すぎてか、馬に乗った警護の武士とドイツ人の二人が勢い余ってそれぞれがこやしを積んだ馬車に衝突、臭気糞々だったとか。

何とも目に見えるようで面白いですね。



☆

☆

とにかく水は澄んで底まで見え、子供たちは飛び込んで遊んでいたと当時を知る人は感慨深く語ります。なるほど、歌手の故渋谷のり子さんが、生前、先ごろの洗足池について「汚い池を見て昔のきれいな思い出を壊されたくありませんもの。水がきれいになったら行きましょう」と語っていたとのこと。ちなみに彼女は昭和11年、美しい当時の湖畔（現上池台二丁目）に北千束から移り住んで池を見つめていたのです。

（小池 沼本 光史）

年男・年女 今年の抱負



★ 12歳

ぼくは、去年、大田リトルリーグという野球チームにはいりました。大田リトルリーグは、朝から夕方までみっちり練習するので、土日が大変です。だから体力つけてがんばりたいです。また、学校の勉強も頑張るぞー！

（笹丸 徳井 健慈）

🌸 24歳

私は、人生二度目の年男を迎えます。一度目は小学校6年生。当時はサッカーに夢中になっていました。ひたすらボールを追いかけて、選手になる夢に向かって走っていました。それから、中学・高校・大学と12年間を過ごし、私は小学校の教員になりました。社会人という立場は、日々今までに経験したことのない責任感を抱えていると感じています。しかし、子供たちと学び、遊ぶことは楽しいですし、充実したものとなっています。また、家族や友人、先輩など私を支えてくれる方々の存在がより大きなものとなりました。そのような人たちを大切にしながら、三度目の年男に向けて、ゆっくり歩いて行きたいと思います。その時は、「あの時は大変だったなあ」と笑って振り返ることができるように、努力を惜しまないつもりです。

（上池上 石坂 祐輔）

🌍 36歳

世界平和 経済安定 金利安定 家族平和 健康成長 交通安全 仕事成功 体力強化 給料向上 幸運向上

（東雪 K・H）

🕒 60歳

齢重ねて60年、自分も赤いチャンチャンコを着る年になろうとは・・・思えば戦後高度経済成長の真只中、団塊の世代として近代化の牽引役として自負し、時代を謳歌してきた。気がつけば、経済低迷、株価暴落、年金も危うい。しかし、しかし人生7掛け、年も7掛け、42歳のつもりで気力体力も充実し、これからの爛熟期に満々と臨みたい。

（南雪谷 宮田 芳一）

👤 72歳

昭和12年生まれ、丑年の年男です。毎週火曜日、石川町文化センターで太極拳を習っています。約30数人で二十四式、八段錦等、型を覚えるのが難しく、一年経った今、やっと覚えめました。また、俳句も月2回教わり、心身共に鍛えております。お蔭で風邪ひとつひかず、健康に過ごしております。

（東中 南 健治郎）

👤 96歳

立て続けに、昨年は4人のノーベル賞受賞者が日本から出て、嬉しくわくわくする出来事でした。弛まず研究された成果が、長い年月をかけ実証され、人類への福音をもたらしたことは喜びにたえません。私も10年を迎える「歎異抄を読む会」のリーダーとして地域の活性化にお役立てできれば幸いと、歳を忘れて頑張っています。

（池の台 柏 翁）

新成人



ありのままで

私は、最近色々な人と再会します。友達のお母さんと会った時など、気付いてもらえないことも多く「大人になったわね！」とよく言われます。自分自身では気付きませんが、確かに成長している私達。月並みですが、本当に周りの方々に支えられてここまで生きてきました。

私には叶えたいささやかな希望や夢があります。やりたいコトだらけですが、ひとつずつ実現できるように努力してきました。大学に行くコト、ヴァイオリンを習うコト、ドラムを始めるコト、バンドを組むコト、アパレル業界で働くコト、大学で友達をたくさん作って楽しむコト、学祭に参加するコトナドナド・・・小さなコトからおおきなコトまで、自分で努力して手に入れたこれらのコトに囲まれて、私は今とても幸せです。しかし、これらを実現できたのは、もちろん私だけの力ではありません。色々な人に、たくさんわがままを言って、たくさんの迷惑をかけて・・・それでも優しい方々に、本当に感謝です。これからも、やりたいコトの実現のために、たくさん迷惑をかけます。それでも、私はありのままの自分でい続けたい。そして、この20歳を機に、頼られる側になることも増えると思いますが、そんな時、笑って受け止められる大きな人間になりたいです。

（上池上 今井 佑香）



過去を見つめて未来へ

20年生きてきて、自分にとって何が大切なのだろうか？そう自分に問いかけた時、私は「経験」と「思い出」の二つが真っ先に頭に浮かんだ。「経験」から何かを学び、「思い出」から何かを感じる。逆もまた然りだ。さらに、両者とも自分にしかわからないという点も重要だ。人と同じことをしていても、そこで何を心に刻むのかはその人次第。なにを当たり前のことを言っているのだと感じる人もいるだろうが、これを認識するのとしらないのでは大きな違いが出てくる。自分の「あるもの」に対する感じ方と、他人が「あるもの」に対する感じ方とは違うのだから、人と人は同じではない、ということ認識することにつながる。おそらく、自分と似たような考え方、感じ方をする人と出会ったことはあるだろうが、変な話、「この人は自分なのではないか」と思える人と出会ったことはないだろう。

以上のように、「経験」と「思い出」の二つを大切に思うことで、結局のところ人は「一人」であって「独り」ではないことを実感してきた。だからこそ、私は人と人とのつながりを大切にしていきたい。そして、その中で己を磨き、成長することで、他人に対し自分が何をしておられるのかを考えながら、これからの人生を歩んでいきたいと思う。

（小池 T・T）